

家庭科における授業者の題材観と学習指導との関連：
教員養成課程における模擬授業の分析を通して

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-07-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小清水, 貴子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00007876

家庭科における授業者の題材観と学習指導との関連

－教員養成課程における模擬授業の分析を通して－

The Relationship between Teachers' Aspects of Teaching Theme
and Teaching Methods in Home Economics Education

－ Analysis of Trial Lesson in Teacher Training Course －

小清水 貴 子^{*1}

Takako KOSHIMIZU

（平成 25 年 10 月 3 日受理）

1. はじめに

家庭科は「家庭生活の充実向上を図る能力と実践的態度を育てる」ことを教科の目標に掲げている。そして、この教科目標に対する学習指導として、技術的領域、認知的領域、情意的領域の3領域があげられる。技術的領域は生活技術を身につけること、つまり生活に必要な技術・技能を習得する。認知的領域は生活のしくみを理解することであり、自然科学的・社会的な秩序や法則を認知することを示す。情意的領域は生活に対する価値観を形成することで、生活価値観（態度）の形成とその内面化を意図している。そして、技術的領域としての生活技術（できる）、認知的領域としての生活の科学的認識（知る・わかる）、情意的領域としての生活の価値認識（気づく）の3つの相互関係を通して、生活問題を解決（考える・行う）する力が育成できる¹⁾。家庭科教育ではこれら3つの領域を相互に関連づけた学習指導を行い、家庭生活の充実向上を図る能力と実践的態度を育てることが求められている。

私たちの生活は個々人の生活価値観に基づいており、一様ではない。教師は目の前にいる生徒の生活実態に応じて学習目標を定め、生徒の生活実態と結びつけた実践的指導を行わなければならない。すなわち、教師の役割は学習指導に適切な教材を選択し、生活における科学的知識と技術・技能を生徒に習得させるとともに、生徒が自己の生活価値観を形成できるように指導することにあるといえる。

しかしながら、教える側の教師も一人の生活者であり、生活そのものを扱う授業において、教師自身の生活価値観と切り離れた授業を行うことは難しい。生徒の実態に即した学習目標を設定する際に、教師の主観的評価が入り込むこともある。また、授業で自身の生活体験を語る教師が少なくなく、無意識のうちに教師の価値観を押しつける可能性も危惧される。たとえば、高等学校家庭科教師を対象にした調査では、年代や婚姻、子育て、介護などの生活経験により、個々の教師によって家族・家庭生活や生活設計を取り上げる視点が異なること、とくに、家族、保育、高齢者などヒトに関する領域と衣食住などモノに関する領域の学習指導内容に対して指導の重点の置き方に差異が生じていることが明らかにされている²⁾。また、中・高等学校の家

*1 家政教育講座

庭科教師を対象にした調査では、教師自らが結婚や子育てなどのライフイベントを経験した際に考え、悩んだことが教材研究として授業に反映され、学習指導内容に広がりや深まりを与えていたことが明らかにされている³⁾。すなわち、授業を行う教師自身のライフコースにおける生活経験を通して教材研究が行われ、授業に影響を及ぼしていることが示唆される。しかし、これらの先行研究は、教師を対象にした意識調査やヒアリング調査の結果から学習指導との関連を探る手法を取っており、教師の意識が、直接的に授業にどのように反映されているのかは明らかにされていない。家庭科教師は1校1名で配置されることが多く、客観的に自己の授業をとらえづらい環境にある。そうした家庭科教師が置かれている現状をふまえた上で、家庭科教育の充実・向上を図るには、教師が行う意識的な指導とともに無意識的な指導も含めて、家庭科教師の学習指導の特徴を明らかにする必要がある。

そこで、本研究では、家庭科の授業を行う授業者の題材に対するとらえ方が授業にどのように反映されるのか、授業者のもつ題材観と学習指導との関連を明らかにすることを目的とする。

ここで、題材観に着目した理由は2つある。一つは、授業でどのような題材を設定するかは個々の教師の判断に委ねられている。つまり、題材の授業の中での扱い方を探ることにより、教師が子どもに何を学んでほしいと考えているかを把握することができる。二つ目は、題材は生活のさまざまな事象の中から教師によって選択される。したがって、題材には教師の生活に対する価値観が反映されていると考えられる。そこで、本研究では題材観を取り上げ、授業における学習指導の関連を探ることとした。

また、本研究で調査対象にする授業の領域は家族・家庭生活領域とした。先行研究において、家族・家庭生活領域の学習指導に教師の生活価値観が表れやすい²⁾こと、授業での家族の取り上げ方が子どもの家族の見方に影響を及ぼすこと⁴⁾が明らかにされている。家族・家庭生活領域では認知的領域に加えて情意的領域の学習指導が加わることもあり、授業者の題材観が授業に反映されやすい。そこで、家族・家庭生活の授業に焦点をあてることにした。しかし、学校現場において家族・家庭生活の授業は、年度初めに実施されることが多い。加えて、年度当初は学校が多忙な時期にあり、現職の家庭科教師に調査を依頼することが困難であった。そこで、授業者の生活価値観と授業との関連をより詳細につかむために、時間的な協力が得やすい教員養成課程に在籍する学生を対象に調査を行うことにした。また、教員養成課程の学生が行う模擬授業は、教える相手である中学生をイメージして行うが、学生が実際の生徒の生活実態を把握することは困難である。したがって、模擬授業で取り上げる題材には、授業者の題材観がより顕著に現れると考えられる。そこで、本研究では、教員養成課程の学生が行う模擬授業を通して、授業者の題材観と学習指導の関連を探ることとした。

2. 研究方法

2.1. 調査時期および対象、調査方法

調査時期は2012年7～12月、対象は国立大学教育学部教員養成課程家庭科教育専修の「家庭科教育法Ⅲ」を履修した2年生女子17名である。調査内容は、家族観に関する質問紙調査、調査対象者が作成した学習指導案、模擬授業、および協力の得られた学生に対するヒアリング調査である。

家族観に関する質問紙調査では、自分自身の将来について、自身の家族関係、思春期の子どもと家族、結婚観、子育て観、性別役割分業観に関する項目を設定し、各項目に対して「6と

でも思う」～「1全く思わない」の6件法で回答を得ることにした。学習指導案は、中学校家庭分野の「A家族・家庭と子どもの成長」の1時間分（50分）で、3年生対象に、家族・家庭生活をよりよくしようとすることに関連した授業という条件で作成する。指導案には、題材名、指導計画、本時の目標、目標の設定理由、使用教材、教材選択の理由、授業過程を記述し、授業で用いる教材やワークシートも合わせて作成する。模擬授業は、指導案作成者が授業者を務め、他の学生は生徒役として模擬授業に参加し、一人あたり50分で行う。授業の様子はビデオに記録する。調査対象の学生は、調査期間中に5日間の小・中学校での教育実習を経験している。しかし、その教育実習で授業実践を行った学生はおらず、授業観察のみであった。したがって、本研究で行う模擬授業は、学生にとって初めての授業実践であった。ヒアリング調査は、自己の家族観、模擬授業について学習目標の設定、学習内容や指導法、教材選択の理由の設問項目を設定し、半構造化面接法で実施する。

2.2. 調査および分析方法

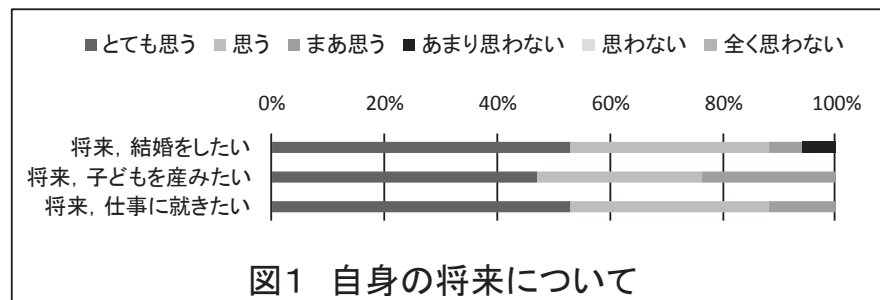
質問紙調査から得られた数量的データは統計的処理をした。質問紙調査および学習指導案の記述データは整理し、授業者ごとに特徴をまとめた。模擬授業は、授業者の家族観や題材観がどのように授業に反映されたか、授業における説明や発問、教材の取り上げ方についてプロトコルを作成した。ヒアリング調査は考察を行うための補足データとして用いた。

3. 結果および考察

3.1. 授業者の家族観

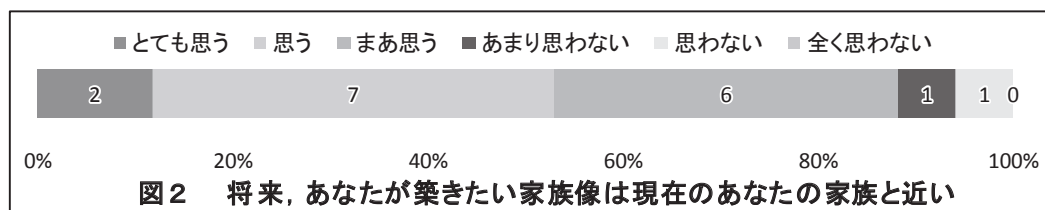
授業者が自身の将来をどのように考えているか、結婚、子育て、就業に関する回答の結果を図1に示す。「将来、結婚をしたい」の項目に対して「あまり思わない」と回答した学生が1名いた。それ以外

はすべての項目に対して「とても思う」「思う」「まあ思う」の肯定的な回答であった。結婚、出産、就業に



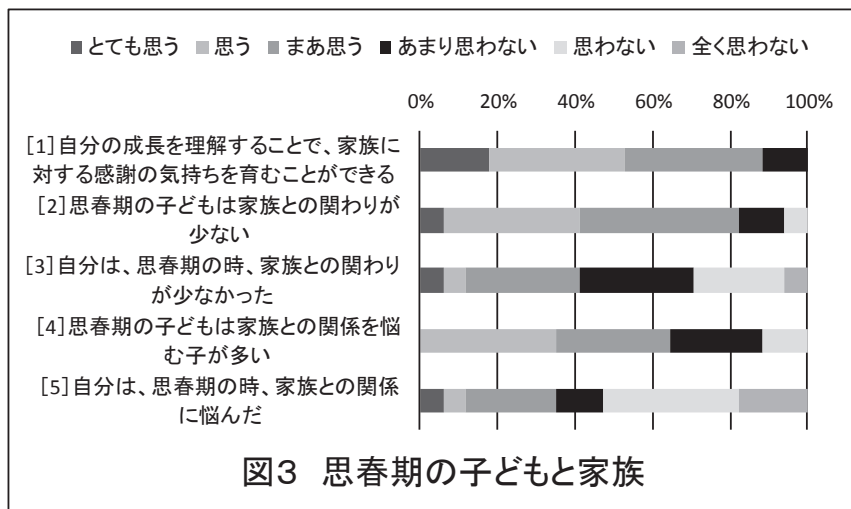
に対してポジティブにとらえていることがわかった。

「将来、あなたが築きたい家族像は現在のあなたの家族に近い」では、15名（88.2%）が「とても思う」「思う」「まあ思う」と肯定的な回答をした。自分の家族を肯定的にとらえているといえる（図2参照）。



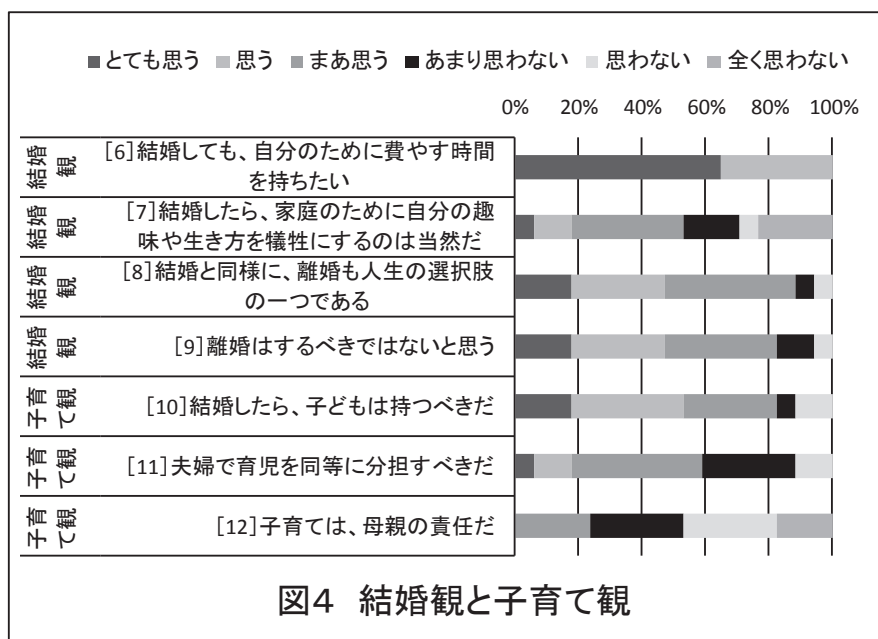
思春期の子どもと家族に関する項目の回答結果を図3に示す。自分の成長の理解が家族に対する感謝の気持ちを育むこと（項目 [1]）は、ほとんどの授業者が肯定的回答であった。一般

的な考え方と授業者自身の経験の差異をみたところ、思春期の子どもと家族とのかかわり（項目 [2] [3]）より、思春期の子どもが家族関係に悩みを抱えること（項目 [4] [5]）の回答の割合に違いがみられた。とくに、項目 [5] は半数以上の



学生が否定的な回答をしており、思春期に家族との関係に悩んだ経験がなかったことが明らかになった。一般的な思春期の子どもと家族のかかわりのとらえ（項目 [2] [4]）と、自身の思春期の頃の家族とのかかわりのとらえ（項目 [3] [5]）が異なっており、自身の経験を切り離して考えていることが推察された。

結婚観と子育て観の結果を図4に示す。結婚観については、「[6] 結婚しても、自分のために費やす時間を持ちたい」「[7] 結婚したら、家庭のために自分の趣味や生き方を犠牲にするのは当然だ」という意識が強く、「とても思う」「まあ思う」の回答であった。その一方で、「[7] 結婚したら、家庭のために自分の趣味や生き方を犠牲にする

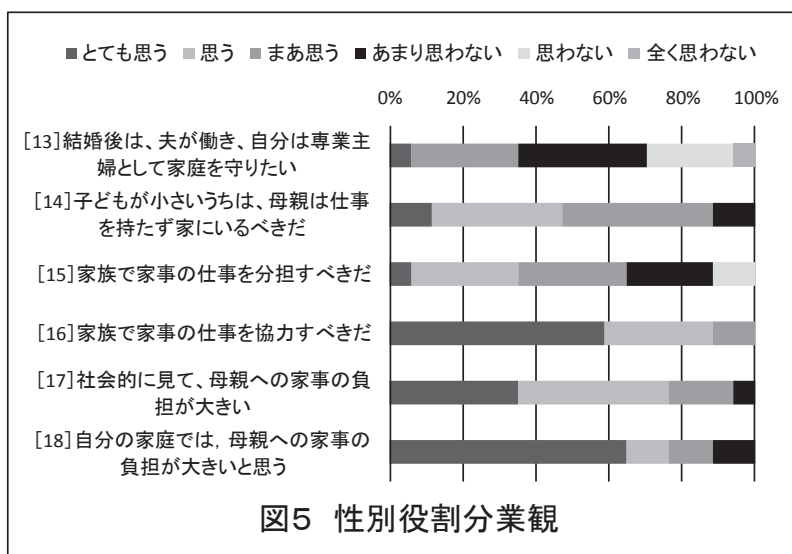


のは当然だ」は肯定的回答と否定的回答が半々であった。離婚に関しては、人生の選択肢の一つではある（項目 [8]）が、するべきではないと思う（項目 [9]）の考えがほとんどを占めた。

子育て観については、約8割の学生が「[10] 結婚したら、子どもは持つべきだ」ととらえ、約半数の学生が「[11] 夫婦で育児を同等に分担すべきだ」と考えていた。項目 [11] の結果と関連して、「[12] 子育ては母親の責任だ」という意見に対しては約8割の授業者が否定的回答をした。子どもをもつことに対する願望が強く、子育ては夫婦で分担して行こうという考えをもっていることが明らかになった。

性別役割分業観の結果を図5に示す。「[13] 結婚後は、夫が働き、自分は専業主婦として家庭を守りたい」では、「とても思う」「思う」「まあ思う」の肯定的回答は6名（35.3%）であった。

半数以上が共働き志向であることがわかった。しかし、「[14] 子どもが小さいうちは、母親は仕事を持たず家にいるべきだ」では「とても思う」「思う」「まあ思う」の肯定的回答が15名(88.2%)であった。共働き志向ではあるが、子どもが小さいうちは母親が世話をする方がよいと考える傾向があることがわかった。



そうした希望を抱くなか、社会的な状況として母親の家事負担が大きい(項目 [17])、授業者自身の家庭においても母親の家事負担が大きい(項目 [18])ととらえていることがわかった。

以上の結果から、授業者は自身の家族を好意的に受け止め、将来、自分が築きたい家族像に近い存在であると考えていることがわかった。また、これからの生き方として、結婚、子育て、就業に対して意欲を持っていた。結婚後の生活について、子育てや家事は夫婦で分担したいと考えていた。しかし、その一方で、子どもが小さいうちは母親が仕事を持たず家にいるべきであるという保守的な側面がみられた。また、母親の家事負担については自分の家庭と同様に、社会的にみても負担が大きいととらえている傾向が明らかになった。

3.2. 授業者の題材に対する問題関心と学習指導の関連

はじめに、学習指導案について述べる。個々の授業者が作成した学習指導案を学習指導要領解説⁵⁾に基づいて分類すると、「(1) 自分の成長と家族 ア自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えること」に関する指導案が4名、「(2) 家庭と家族関係 ア家庭や家族の基本的な機能と、家庭生活と地域とのかかわりについて理解すること」に関する指導案が7名、「(2) 家庭と家族関係 イこれからの自分と家族とのかかわりに関心をもち、家族関係をよりよくする方法を考えること」に関する指導案が6名であった。

つぎに、題材に対する授業者の問題関心が学習指導にどのように現れたのかを明らかにするために、問題関心が異なる2名の授業者についてみる。

表1に示すように、授業者Dと授業者Fはともに「(1) 自分の成長と家族 ア自分の成長と家族や家庭生活とのかかわりについて考えること」の項目を取り上げた。指導案では、生徒自身が自分の成長の振り返る活動を通して、家族や家庭生活のかかわりを考えることを目標にした授業を構想した。しかしながら、「自己の成長を通して家族とのかかわりを考える」という題材に対する両者の題材観をみると、授業者Dは強い問題関心を抱いており、授業者Fはあまり問題関心を抱いていなかった。以下に、詳細をみていく。

授業者Dは、学習目標を「自分の成長を振り返ることによって、中学生の時期にある自分と家族や家庭生活のかかわりについて考え、自分の成長や生活は家族やそれに関わる人々に支えられてきたことに気づくようにする。また、年表にまとめることによって、自分自身の今まで

表1 同じ題材を扱った授業者Dと授業者Fの授業の概要

授業者	授業者D	授業者F
題材名	自分年表を作ろう	自分の成長と家族
学習目標	自分の成長を振り返ることによって、中学生の時期にある自分と家族や家庭生活のかかわりについて考え、自分の成長や生活は家族やそれに関わる人々に支えられてきたことに気づく。また、年表にまとめることによって、自分自身の今までの人生を視覚的にとらえることができる。	自分の成長と家族や家庭生活との関わりについて考える。
教材	・ワークシート（自分年表）	・ワークシート（成長記録）
授業内容	①本時の目標を確認させる。 ②印象に残っているエピソードを思い出して、年表を作成させる。 ③成長過程における生活の変化に気づかせる。 ④自分の生活と家族とのかかわりに気づかせる。	①さまざまな家族形態について理解させる。 ②本時の目標を確認させる。 ③自分の成長記録を記入、共有させる。 ④③の記録で家族との関わりに○を付けさせ、家族の支えによって自分の生活が築かれていることに気づかせる。
授業時の発言	「私たちの生活にはすごい家族が関係しているってことが振り返ってみるとわかると思います。」	「私たちってというのは、家族と関わって成り立っているんですよね」
題材観	・授業を構想したときに、親の顔が浮かび、最近会っていないなと思い、自分の成長を振り返って、家族に感謝できる題材にしたいと思った。	・自分の成長を理解したから、家族への感謝の気持ちが育めるわけではないと考えている。

の人生を視覚的にとらえることができる。」と設定した。そして、印象に残っている成長のエピソードから生徒に自分の年表を作成させ、家族とのかかわりに気づかせる授業を構想した。学習目標の設定理由について「家族や家庭生活をよりよくするためには、家族や家庭生活のことを知り、理解していかなければならない。普段の生活の中で、自分が生まれたときから今までの生活を振り返る機会はなかなかないだろう。中学校3年生の時期は反抗期なので、親への感謝の気持ちを持っていたとしても素直に表現できなかつたり、ふとした瞬間に感謝の気持ちを忘れてしまったりすることも多いだろう。…（中略）…自分がどれだけ大切に育てられてきたか実感し、普段の生活の中で忘れてしまいがちな家族や周囲の人々への感謝が生まれる。それらの活動を通して、家族や周囲への感謝の気持ちを持ち、一生懸命に生活していこうという意欲を持つようになってほしい。」と記述していた。また、模擬授業の最後のまとめでは、「私たちの生活にはすごい家族が関係しているってことが振り返ってみるとわかると思います。」と発言した。つまり、授業者Dは、自分の成長と家族のかかわりを理解することを通して、家族に対する感謝の気持ちを育むことを意図して授業を行っていた。

一方、授業者Fの授業は、ワークシートとして年齢ごとに区切った表を提示して「自分の成長記録を書き入れましょう。」と生徒に指示し、成長記録から家族とのかかわりに気づかせる構成であった。授業者Fは、授業の目標を「自分の成長と家族や家庭生活との関わりについて考える。」と設定した。そして、学習目標の設定理由について、「現代の子どもの非行などの問題に一番関わりがある箇所であると思ったため、自分の成長と自分の家族や家庭生活について考えさせたい。自分の成長やその過程を理解することで、自分の家族や家庭生活がどのように

かわってきたか、また、そこから発展させて自分の成長や生活は家族やそれにかかわる人に支えられてきたということを理解することができると思った。」と記述した。授業者Fは質問紙調査では「自分の成長を理解したからといって、家族への感謝の気持ちが育めるわけではない。」と回答していた。つまり、授業者Fは本授業で家族に対して感謝の気持ちを育むことは意図しておらず、自分の成長に家族がかかわっているという事実気づくことを意図していた。

学習指導要領では、「(1) 自分の成長と家族」では「ア自分の成長と家族や家庭生活とのかわりについて考えること」を指導すると述べられている。授業者Dと授業者Fの授業はともに、この学習目標に向けて、生徒がこれまでの成長を振り返り、自分の成長に家族や家庭生活がかかわりについて考える内容を取り上げていた。

しかし、実際の授業の着地点をみると、授業者Dは家族に感謝の気持ちをもつこと、授業者Fは家族の存在に気づくことであり、両者の着地点は異なっていた。また、自分の成長記録をワークシートに書き出すという学習活動は両者に共通であったが、授業者Fは「幼稚園／小学校に入学する」「自転車に乗れるようになった」「入院した」などを書き出すように指示した。一方、授業者Dは、印象に残っているエピソードを思い出して年表を作成するように指示し、生徒の内面に迫る学習活動を設定して、そこから家族への感謝の気持ちを促すという情意的領域の指導の側面がみられた。そこには、授業者Dの「授業を構想したときに親の顔が浮かび、最近会っていないなと思い、自分の成長を振り返って、家族に感謝できる題材にしたいと思った。」という題材に対する強い問題関心が関連していると推察される。以上から、同じ題材を扱った授業でも、授業者の題材に対する問題関心が学習指導に影響を及ぼすことがわかった。

3.3. 授業者の家族観や生活経験と学習指導の関連

授業者が題材に対して問題関心を持つかどうかは、授業者の家族観や生活経験と関連があると考えられる。そこで、授業者の家族観や生活経験と学習指導の関連についてみる。

授業者の家族観や生活経験と指導案や授業への現れ方を検討した結果、2つの傾向があることがわかった。授業者の問題関心が授業内容を促進させる要因として働く場合と、逆に、阻害させる要因として働く場合である。それらの傾向の特徴が明確にみられた4名の授業者についてみていく。

3.3.1. 授業者の家族観や生活経験が学習指導の促進要因として働いた事例

まず、授業者の問題関心が学習指導を促進する要因として働いた授業者Mと授業者Jについてみる。授業者Mと授業者Jの授業の概要を表2に示す。

授業者Mは父、母、弟の4人家族で、現在、一人暮らしをしている。将来は小学校教員を志望している。授業者Mの家庭では、ほとんど母親が家事を行い、たまに父親や自分が手伝っている。家事に関して、両親の喧嘩が日常茶飯事であるという。家族関係については、とても仲がいいわけではないと感じているが、母親とは毎日のように連絡をとっており、授業者と父親の2人で食事に出かけることもある。授業者Mは、授業の題材名を「男女共同参画社会を目指して」とした。学習目標を「男性の育児休業について、その良さや問題点を理解する。」「男女がお互いの良さを認め合い、支え合いながら生活していく事が大切である事に気づく。」の2つをあげた。これらの学習目標の設定理由として、「中学生の時期は思春期を迎え、親をはじめとした家族に対して、まだ依存していたいと思う反面、反抗的な態度をとる子が多い。その

表2 授業者の家族観や生活経験が促進要因として働いた授業者Mと授業者Jの授業の概要

授業者	授業者M	授業者J
題材名	男女共同参画社会を目指して	家族って何？
学習目標	<ul style="list-style-type: none"> ・男性の育児休業について、その良さ と問題点を理解する。 ・男女がお互いの良さを認め合い、支 え合いながら生活していく事が大切 である事に気づく。 	<p>家族とはどんな集団のことを示すかについて考えることを通して、自分がいかに人に支えられて生きているかを知る。同時に、自分がいかに人を支えているかについても実感し、自分が生きる上で不可欠な「人とのつながり」について考える。また、いろんな家族形態があることを知り、多様な価値観を認める精神を養う。</p>
教材	<ul style="list-style-type: none"> ・資料（男女共同参画社会） ・ワークシート 	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシート ・家族形態の資料
授業内容	<ol style="list-style-type: none"> ①資料を提示し、ジェンダーに関する問題を取り上げ、育児休業について考えさせる。 ②男女共同参画社会について理解し、男女が協力していく必要性に気づかせる。 	<ol style="list-style-type: none"> ①様々な家族形態から「家族」の定義を考えさせる。 ②家族が果たす役割について考えさせる。 ③どんな形態の家族でも、共通していることは「助け合っていること」であることを理解させる。
模擬授業時の発言	<p>「男は外で仕事をして、女は家で家事をしたり、育児をしたりっていうことを、みんなも聞いたことがあると思うんですけど…」</p> <p>「反対意見でもあったように、男性の方が賃金が高い等、男は仕事という感じがある…」</p> <p>「まだ社会では（男女共同参画に対して）問題もあるけど、自分たちに出来ることもあると思います」</p>	<p>「家族って何？」</p> <p>「共に生活する、親がいる、子どもがいる、みんなこれが家族って思っていると思います。私もそう思います。」（「家族ではない」という意見が多い中）</p> <p>「この人のお話を読んで家族って素敵だなって思ったよ。」</p> <p>「精神的な支え、経済的な支えだね」</p> <p>「自分が家族に支えられていると同時に、家族の支えになっているっていう裏返し」</p> <p>「私は、家族って何かわからなくていいと思ってる。それぞれの感じ方でいいと思うよ。」</p> <p>「家族って思える人が増えるほど幸せじゃない？」</p>
家族観	<ul style="list-style-type: none"> ・母親の家事負担意識がとても強い。 ・家事は女性がするものという考え方が社会的に根強いと感じている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・結婚に対して願望がない。 ・中学生は家族について真剣に考える機会がないが、人のつながりとして家族を理解することは大事。

中で、親子や家族関係がうまくいかなくなることも少なくない。普段の生活の中において家庭で行われている仕事は、家族がお互いのために行っているということに気づき、今の生活が当たり前になっていないか考えてほしいと思った。また、家庭生活の中で、自分が家族の一員として家族のためにできることは何かを考えて実践してほしい。さらに、家族の一員としての自分の役割を考えたことを通して、家族関係をよりよくするためにはどのようなことが大切であるかということに関心をもち、これからの自分の生活に関連させてほしいと思ったため。」と記述した。授業では男性の育児休業を取り上げ、そのメリットとデメリットを考えさせる活動を通して、男女がお互いの良さを認め合い、支え合いながら生活していく事が大切であることに気づかせる内容を展開した。模擬授業の中で「まだ社会では（男女共同参画に対して）問題

もあるけど、自分たちにできることもあると思います。」と述べ、男女共同参画社会の実現に向けて子どもたちの行動を促したいという自身の考えを示した。

この題材を取り上げた理由について、授業者Mは「家族の役割を取り上げたかった。なんか、一回（授業を）作ったんですけど、淡々としか考えられなくて…。自分の意見とかも考えさせられる授業にしたいなと。（聞き手：なぜ、家族の役割について教えたいと思ったの？）やっぱり自分にとって家族は心の支えなので、そういうことを伝えたいと思いました。私の住んでいた地域が結構、田舎で、男性の方が偉いみたいな考え方があったみたいで。私が生まれた時とか、親戚の集まりの時に、おばあちゃんが台所でご飯を食べて男の人だけが客間に集まるっていうのがあったみたいで。お母さんはそれを見ておかしいって思ったらしく、私もおかしいって思います。今はそういうことはあまりないですけど、やっぱり家事は女の人って感じですね。こういうところから、男女共同参画社会っていうのを言いたいなあとと思いました。」と語った。つまり、授業者Mは自身の家族観や生活経験が題材設定の動機となり、男女共同参画社会の学習指導を促進させる要因として働いていた。

授業者Jは父、母、兄、妹の5人家族であり、現在は一人暮らしをしている。将来は小学校教員を志望している。授業者Jの家庭では、主に母親が家事をしているが、父親も手伝うことがある。しかし、授業者Jは家事をしていない。家族関係はとても仲が良く、良い家庭に生まれたと感じ、自分の家族は何をしても絶対に裏切らない存在だと思っている。授業者Jは、授業の題材名を「家族って何?」とし、人とのつながりに焦点をあてた家族関係を理解する授業を展開した。授業者Jの学習目標は「家族とはどんな集団のことを示すかについて考えることを通して、自分がいかに人に支えられて生きているかを知る。同時に、自分がいかに人を支えているかについても実感し、自分が生きる上で不可欠な「人とのつながり」について考える。また、いろんな家族形態があることを知り、多様な価値観を認める精神を養う。」であった。そして、学習目標の設定理由として「いて当たり前と思われる家族について問い直す。思春期であり、親に対して反感を持つ子どもも多いだろう。また、受験のストレスなどから、家族に対してなかなか素直になれない時期であるかもしれない。そこでより自分の家族を客観的に見つめることで、家族は自分にとってなくてはならない存在であることに気づくことができるのではないだろうか。人とのつながりを大切にしようとする精神により、自分から外に働きかけようとする態度が形成され、それが家族関係をよりよくすることにつながる。離婚、再婚などによって家族に対して複雑な思いを持つ子どももいるだろう。しかし、それは人生の中の一つの選択であって決して不幸なことではないと知ってもらいたい。家族には様々な形態があり、世界には多様な価値観があるということを認めることも重要である。世間一般にある伝統的な価値観や偏見により生きづらさを感じている人が世の中にたくさんいるが、多様な価値観を認めるという精神こそがその問題の解決に直結する。自分の将来設計に関しても、選択肢は多様化するであろう。中学生である今、人を理解する精神を養うことで、自分自身の生活をよりよくすることにつながっていくと考えられる。」と記述した。

この題材を取り上げた理由について、授業者Jは「私は、その授業っていうよりも家族関係論の授業の影響がすごく大きくて…。前は、本当に典型的な家族が幸せって思っていて、自分もお父さん、お母さん、子どもっていう存在もいるし、将来も作っていきなと思ってたんですけど…。その家族関係論の授業を聞いて、たとえばゲイとかレズとかそういうのも。でも幸せな家族もいるし、子どもを望まないカップルもいるし…とか、いろんなことを聞いてなる

ほどと思いました。前は、大っぴらに偏見を持っていたわけではないけど、今は本当にそういうのもあっていいよねって思えますね。自分自身が家族関係論からすごく影響を受けたので、そういう授業ができたらいいなって思って。(授業内容が) 家族関係論とほぼ同じような感じですよ。」と語った。つまり、授業者Jは自身の家族観が大学の講義を受けて大きく揺らいだことを肯定的に受け止め、それが題材設定の動機となり、家族とは何かを考える学習指導を促進させる要因として働いていた。

以上の結果から、授業者の家族観や生活経験が強い問題関心を引き起こし、学習指導がより促進されたことが明らかになった。

3.3.2. 授業者の家族観や生活経験が学習指導の阻害要因として働いた事例

つぎに、授業者の問題関心が学習指導の阻害要因として働いた授業者Hと授業者Oについてみってみる。ここでは、授業者の問題関心として家事分担意識に着目した。授業者Hは、家庭における母親の家事負担を強く感じており、家事分担意識について問題関心を持っていた。しかし、家族観や生活経験から学習指導を避けたことがわかった。また、授業者Oは家族観や生活経験から家事分担の必要性を感じておらず、家事分担について問題関心を持っていないことから、学習指導の必要性を感じていなかった。それぞれの詳細について、以下にみていく。

授業者Hは父、母、弟の4人家族で、現在は一人暮らしをしている。将来は教員を志望しているが、小学校か高校か悩んでいる。授業者Hの家庭では、家事は家族で分担していた。しかし、授業者Hは強制的に手伝わされていたのが嫌だった。家族関係はとても仲が良く、家族でいる時間を大切にしている。現在も常に気かけ、よく連絡を取っている。しかし、「中学校の頃は父がとても厳しく、怖かった。」と語った。授業者Hは、指導案作成や模擬授業において、あえて家事分担の授業ではなく、家族関係を扱う授業を取り上げた。授業者Hは母親の家事負担に対する意識が高いにも関わらず、「家事をやらされている感が強かったですね。自分はお小遣いをもらうために手伝いをしていたので…」の発言にみられるように、自らが中学生の時に家事を手伝う事に苦痛を感じていた。そうした経験から生徒には同じ思いをさせたくないと考え、家事分担を授業で扱うことに否定的な考えを持っていた。つまり、自らが家事をさせられたことを苦痛に感じた経験が、生徒に家事労働を促す学習指導を避ける要因になったことが推察された。

授業者Oは父、母、妹、弟の5人家族で、現在は実家から通学している。将来の進路はまだ決められず、悩んでいる。授業者Oの家庭は、母親が一人で家事を行っている。頼まれれば授業者Oも手伝うが、自ら進んではやらない。家族関係は仲が良い。しかし、父親は仕事が忙しいので、あまりコミュニケーションが取れていない。授業者Oは、授業者Hと同様に、指導案作成や模擬授業において家事分担の授業ではなく、家族形態を扱う授業を取り上げた。仕事が忙しい父親を持つ授業者Oは、授業で家事分担を扱うことのみならず、家族で家事を分担することの必要性を感じていなかった。授業者Oは、家事分担について「これは、ほんとに家族ごとの問題だと思って…、本当に分担した方が良い家族は実際あると思うから、そういう家族はすればいいけど、どちらかが仕事に集中して、どちらかがサポートに回るのであれば上手くいく家族もあると思うので、それは無理矢理、分担しなくていいと思う。」と述べた。両親がお互いの役割を理解し、助け合って生活しているという家庭環境から、授業者Oは家族で家事を分担する必要性を認識しておらず、学習指導の必要性を感じていないことが示唆された。

以上から、授業者が家族観や生活経験から題材に対して問題関心をもっている場合でも、それが逆に作用し、学習指導を避ける要因として働くことがわかった。また、授業者が自身の家族観や生活経験で問題関心をもたない場合、学習指導の必要性が認識されず、学習指導が行われない傾向があることが明らかになった。

これまでの結果から、授業者の題材に対する問題関心が学習内容に影響を与えること、授業者の家族観や生活経験が学習指導の促進要因あるいは阻害要因として働くことが明らかになった。題材は学習目標を達成するための手段であり、最も重要なことはその題材を通して子どもに何を学ばせるのか、学習目標を明確に定めることである。学習目標を明確にした上で、指導を円滑に進めるためにはどんな題材を取り上げるのが適切なのかを吟味して、題材を設定することが必要である。

教材研究から指導案作成までのプロセスとして、教材研究から学習目標を設定して指導計画を作成するパターンと、学習目標を設定して教材研究を行い、指導計画を作成するパターンがある⁶⁾。とくに、前者の、教える領域について先に情報収集を行い、家庭科の学習内容におけるテーマを位置づけてから学習目標を設定するパターンは、学習内容に関する知識や経験が十分ではない教育実習生や新任教員に多くみられる。後者は、比較的経験がある教師が日常的に目の前の生徒の実態に対して問題意識を持ち、その解決をはかるために授業を構想する場合にみられる。本研究は教員養成課程の学生を対象としており、教える対象になる中学生の実態を十分に把握できていなかった。その結果、前者のパターンに近く、授業者の問題関心が学習指導に影響を与える傾向が顕著にみられたと考えられる。それはつまり、授業者が教える対象に対する意識を十分に持ち得ていない場合、授業者自身の生活価値観や問題関心が授業に強く関与する危険性を示唆している。

本研究において、授業者Hと授業者Oはともに、自身の生活経験から家事分担に関する学習指導を避けていた。しかしながら、授業者Hは中学生の時期に家事分担の負担を実感したからこそ、家庭生活を成り立たせるために必要な家事を、家族みんなで協力して行う必要性を教えられると考えられる。分担を、個々の家族員に仕事を課すこと（授業者Hは「お小遣いをもらうための仕事」と回答していた）としてとらえるか、家族の一員としての役割を果たすこと、つまり協力としてとらえるかでも、家事分担を扱う視点は異なる。また、授業者Oの場合は父親と母親の性別役割分業に支障を感じず、家事分担の指導の必要性を感じていなかった。しかし、図5に示すように「[17] 社会的な状況として母親の家事負担が大きい」について「とても思う」「まあ思う」「思う」と約9割が回答しているように、性別役割分業における社会的課題を認識して授業に臨む必要がある。教員養成課程の学生に授業づくりの指導をする際に、自分の生活価値観や生活経験だけに頼らず、教える内容について十分な知識を習得させること、多様な価値観を知り、視野を広げさせることの課題が示唆された。

1校1名配置で一人教科と言われる家庭科教師は、とくに自身の授業を客観的にとらえる目を養い、幅広い視野から教材研究を行い、家庭科の学習指導の充実に努めることが求められる。

4. まとめと今後の課題

本研究の目的は、家庭科の授業を行う授業者の題材に対するとらえ方が、授業にどのように反映されるのか、授業者のもつ題材観と学習指導との関連を明らかにすることである。

得られた結果は以下のとおりである。

- (1) 授業者たちは自分の家族を好意的に受け止め、結婚、子育て、就業に対して意欲を持っていた。子育てや家事は夫婦で分担したいと考える一方で、母親は子どもが小さいうちは家にいるべきで、母親の家事負担が大きいと考えていることが明らかになった。
- (2) 授業者の題材に対する問題関心と学習指導の関連では、同じ題材を扱った授業でも、その題材に対して授業者の問題関心がある場合とない場合では、題材の扱い方が異なり、学習指導の内容に違いが生じていた。
- (3) 授業者の家族観や生活経験と学習指導の関連では、授業者の家族観や生活経験が学習指導を促進させる要因として働く場合と、阻害させる要因として働く場合があることが明らかになった。

以上の結果から、授業者は自身の家族観や生活経験を客観的にとらえ、幅広い視野から教材研究を行い、授業を行う必要があることが示唆された。今後の課題は、実際に行われている家庭科の授業において、教師の題材観と学習指導の実態をより明らかにすることである。

最後に、調査にご協力をいただきました学生のみなさん、データの整理・分析にご尽力をいただきました進士文美さん（当時、静岡大学教育学部4年生）に謝意を表します。本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号21730702）の助成を受けて行われた研究の一部である。

参考・引用文献

- 1) 中間美砂子編, 家庭科の教科理論, 家庭科教育法, 建帛社, 2007
- 2) 小清水貴子, 教師のライフコースと家庭科の学習指導観との関連, 静岡大学教育学部研究報告教科教育学篇第43号, pp.191-202, 2012
- 3) Takako KOSHIMIZU, The Relationship between Home Economics Teachers' Lifestyle Consciousness and Teaching, IFHE XX II World Congress 2012, p.154, 2012
- 4) 矢野由起・林田京子, 家庭科における家族学習が児童の家族の見方に及ぼす影響, 日本家庭科教育学会誌第47巻第4号, pp.307-317, 2005
- 5) 文部科学省, 中学校学習指導要領解説技術・家庭編, 教育図書, 2008
- 6) 伊藤葉子・鶴田敦子編著, 授業力UP家庭科の授業, 日本標準, 2008